大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『百舌鳥国文』総目次（第一号～第三十号）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017441

『百舌鳥国文』総目次（第一号～第三十号）

第一号（一九八一年七月）

伊勢物語、その最後の増益 ―百二十五段本にない章段の性格― 益田 まき

屏風歌と歌集 ―忠君朝臣屏風歌を中心に― 中 周子

実朝歌の解釈について ―「おほあらきの浮田の杜にひく標の」の場合― 三木 麻子

「並木正三」の読み方について 櫻井貴美子

「兵書」について 谷 有子

第二号（一九八二年五月）

「伊勢物語」源融パトロン説存疑 片桐 洋一

「在中将集」の原形 青木賜鶴子

「大斎院御集」と「大斎院前の御集」 ―その編集意図と方法の相違― 中 周子

片桐洋一先生蔵「うす雲抄」翻刻と解説 田中まゆみ

大阪女子大学附属図書館蔵 芝居番附・絵尽目録（追加） 櫻井貴美子・林 公子

第三号（一九八三年六月）

北相公本業平集の資料となった伊勢物語 青木賜鶴子

『俊頼髄脳』に引用された古今集の本文について ―その復元と考察― 鳥井千佳子

新勅撰集の伊勢物語歌 生澤喜美恵

『古今集冷泉持為抄』の一性格 ―『百人一首満基抄』の引用に関連して― 田中まゆみ

第四号（一九八四年九月）

延命の構図 ―三国伝記の延命の説話をいとぐちに― 廣田 哲通

源氏物語の風景 ―その手法と意味― 清水婦久子

『河海抄』文禄五年奥書本の性格 ―所引の『伊勢物語』本文による考察― 田中 まき

神宮文庫蔵・守武本『伊勢物語聞書』は実隆説にあらず ―三条西家流伊勢物語注釈の展開（一）― 青木賜鶴子

三座由緒書の史料的性格について 林 公子

第五号（一九八五年十月）

家持集 ―その原形― 山崎 節子

別本『清慎公集』について 生澤喜美恵

源俊頼の和歌 ―古歌利用の方法をてがかりとして― 鳥井千佳子

「ひとり」考 ―王朝和歌の風景と展開― 清水婦久子

夏の露 ―中世和歌への一動向― 三木 麻子

近松徳三における読本の歌舞伎化について 坂根由規子

第六号（一九八六年十月）

家持集 ―その成立― 山崎 節子

新撰万葉集の「和」と「漢」 ―暁露鹿鳴花始発― 泉 紀子

平安時代における『和漢朗詠集』の書写と享受 木藤 智子

「多賀切」から「新撰朗詠集」へ ―詩題注記と「付」項目を手掛りに― 今井 昌子

宇津保物語の会話文 蔵野 元子

三条西実隆における伊勢物語古注 ―「伊語聴説」「称談集解」に触れつつ― 青木賜鶴子

第七号（一九八七年十月）

定家本を超えて ―「伊勢物語」の成立に関する臆見二題― 片桐 洋一

群書類従本系統「大江千里集」の文保二年増補歌について ―千里の伝記に関連して― 内田美由紀

後撰集の万葉歌 ―その性格と意義― 前田依久子

『新勅撰集』の詞書と巻頭歌 ―藤原定家の撰者意識をめぐって― 生澤喜美恵

「夏浴衣清十郎染」の意図 福嶋三知子

「碁太平記白石噺」の上演形態について ―黄表紙を資料にして― 神楽岡幼子

第八号（一九八八年十月）

紀貫之歌の漢詩的表現と場 木藤 智子

源氏物語と王朝和歌 ―哀傷歌における景と情― 清水婦久子

芝居種の黒本の作法 神楽岡幼子

条件表現について 三谷由美子

第九号（一九八九年十月）

顕昭「古今集注」所引の伊勢物語本文について　内田美由紀

「源氏狭衣歌合」の番とその形成　東野　泰子

蕉風前書考　―許六・去来の俳論を通して―　金田　房子

『銀の匙』試論　豊島　緑

第十号（一九九〇年五月）

特集　大阪女子大学図書館蔵　漱石単行本解説

清水　康次・青田　寿美・澤　美香代・西川　祐代

『百舌鳥国文』総目次（第一号～第十号）

第十一号（一九九一年十一月）

横光利一「機械」論　岸本かおり

『永日小品』「猫の墓」漱石自筆原稿（影印と解説）　宮内　博子

現代大阪アクセントのゆれ　―アクセント型の機能負担量の観点から―　野村　華代

「誰も」と「何も」　―否定対極性をめぐって―　山田　潤子

〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について　付・連濁論原論文「日本語の連濁」全訳　屋名池　誠

第十二号（一九九四年三月）

伊勢物語第九十四段「千々の春ひとつの秋にまさらめや（大島本）」　内田美由紀

能「楊貴妃」の典拠　―『長恨歌』『長恨歌序』『長恨歌伝』の伝本をめぐって―　王　冬蘭

横光利一「機械」試論　山本　恵理

近代日本語資料としての『英和通信』　―その書誌的調査―　谷口　優樹

第十三号（一九九七年十一月）

『増鏡』と神祇信仰　―序文の言葉と歌をめぐって―　正田　佳代

梶井基次郎「冬の蝿」論　―「闇」の認識を視座として―　黄地　桃子

太宰治「研究ノート」Ⅰ・Ⅱ　―「燈籠」「姥捨」「花燭」を中心に―　米田　知世

『文字禍』考　戸塚安津子

志賀直哉論（一）　―喪失のかたち―　山崎　正純

『袖珍・英和節用集』初編の「補充された訳語」　呂　麗敏

第十四号（二〇〇一年三月）

謡曲「生田敦盛」と「こあつもり」　澤野　加奈

初期志賀直哉論　―その死生観からのアプローチ―　首藤利津子

太宰治「ダス・ゲマイネ」論　―再生する文学―　石原みずき

戦後〈在日〉文学論（二）　―抑圧と想像力、あるいは「つぶやきの政治思想」―　山崎　正純

第十五号（二〇〇三年三月）

落窪物語の研究　―物語の展開と「縫ふ」ということをめぐって―　熊坂恵美子

『古今著聞集』管絃歌舞の研究　―巻第六「管絃歌舞」を中心に―　亀井　祥子

太宰治『人間失格』論　―葉蔵の〈恥〉と戦後の〈衰弱〉―　森鼻　香織

〈敗戦〉後文学論（一）　―武田泰淳と上海―　山崎　正純

第十六号（二〇〇五年三月）

『伊勢物語』と『古今集』　片桐　洋一

『勝鹿真間娘子を詠む歌』論　神保　智

伊勢物語「筒井つの」考　―龍田道と関連して―　内田美由紀

『伊勢物語古意』の諸本について　田中　まき

大英博物館所蔵「伊勢物語図屏風」を読む　―図様の引用と転用―　泉　紀子

『元良親王集』の表現　―「入りにし月」をめぐって―　三木　麻子

平中物語第二段の和歌　―歌物語の場面性など―　青木賜鶴子

源氏物語の巻名と歌語　清水婦久子

『拾遺抄』と『拾遺集』　―恋部に共通する人麿歌をめぐって―　中　周子

現存『和泉式部正集』共通祖本新考　―定家本との関係をめぐって―　岸本　理恵

承暦二年内裏歌合の二種類の判詞について　鳥井千佳子

『定家八代抄』と勅撰集恋部の四季配列　―『新古今集』との比較を中心に―　細川知佐子

近世前期における松花堂流受容の一側面
—藤田乗因と桑名藩士の交流を手掛かりに—　川畑　薫
追善興行摺物「和田合戦女舞鶴」をめぐって
—堺の二代目中村富十郎—　北川　博子
『大菩薩峠』試論　—机龍之助の〈剣〉　米田　知世
太宰治「ダス・ゲマイネ」論
—〈賊〉言説と〈近代〉の外部—　岡村　知子
『百舌鳥国文』総目次（第一号〜第十六号）

第十七号　（二〇〇六年三月）
『百舌鳥国文』第十七号発刊に寄せて　竹下　豊
『枕草子』の基盤は和歌　片桐　洋一
三島由紀夫「憂国」論　—〈孤忠〉と〈嫉妬〉—　久保田恭子
三条西実隆講・清原宣賢筆記「伊勢物語惟清抄」について
冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について
—『万葉集』次点本としての『人麿集』—　青木賜鶴子
『発心集』の仏法と王法（1）
—巻頭遁世者説話群の意味するもの—　竹下　豊
田中　宗博

第十八号　（二〇〇七年三月）
公任の秀歌撰にみる『万葉集』享受
枕草子「二月つごもりごろに」の段年時考
—官職呼称の問題をめぐって—　阪口　和子
『後拾遺集』四季部と『拾遺集』　赤間恵都子
『発心集』の仏法と王法（2）
—聖徳太子・行基・役行者の不在—　中　周子
編制される〈私たち〉の婚姻　—太宰治「ヴィヨンの妻」論—　田中　宗博
太宰治とロマン主義の背理　—『新ハムレット』への一視角—　永吉　寿子
勝田真由子

第十九号　（二〇〇八年三月）
心誉験者説話の始原と展開
—『富家語』の言談とその受容の諸相—　田中　宗博
『源氏物語』若紫巻「あしわかの浦」について
—紫の上の登場とその背景—　金田　圭弘
太宰治『猿面冠者』における語りの戦略
—『鶴』との関わりを中心に—　久保　明恵
金時鐘の日本語表現　—『猪飼野詩集』を中心に—　浅見　洋子

第二十号　（二〇〇九年三月）
『伊勢物語』補充章段をめぐって
〈源氏物語小特集〉
幻の大沢本源氏物語　片桐　洋一
『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか　伊井　春樹
源氏物語における「動詞連用形＋名詞」の語形
—和歌の造語法からみて—　今西祐一郎
斐文会特別講座「源氏物語の千年」　神谷かをる
萩原広道『源氏物語評釈』初版八冊本から十三冊本へ　清水婦久子
神亀四年正月の雷電　青木賜鶴子
万葉集の雁考　村田右富実
『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について　朴　喜淑
藤原忠実の言談に現れた僧達
—『中外抄』『富家語』の僧侶概観—　佐々木紗代子
久保栄「火山灰地」試論　—リアリズムの基底—　田中　宗博
福永武彦「風のかたみ」論　—「姫君」像を越えて—　岡村　知子
稲垣　裕子

第二十一号　（二〇一〇年三月）
『春日権現験記絵』と『中外抄』をめぐる一考察
—東三条邸に出現した天狗、そして覚鏡—　田中　宗博
赤人「神岳作歌」考　朴　喜淑
中島敦「虎狩」論　—言葉・文字をめぐって—　趙　楊
太宰治「畜犬談」論　—再生する〈笑い〉—　芦田　祐季

第二十二号　（二〇一一年三月）
万葉集の「鳴く鳥」　—「鳴く鳥」を歌うことの意味について—　朴　喜淑
天平六年春三月難波宮行幸歌群考　小田　芳寿
『徒然草』における有識故実的章段の研究
—『中外抄』『富家語』を視野において—　池上　保之
中島敦「古俗」論　—〈父殺し〉の物語—　趙　楊

第二十三号　（二〇一二年三月）
源氏物語の現代性について　片桐　洋一
万葉集における「のる」と「告ぐ」をめぐって　阪上　望
『徒然草』における言談章段の研究　池上　保之
金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（上）　浅見　洋子
―記憶を語ることの歴史性―

第二十四号　（二〇一三年三月）
東アジアにおける死の叙情性　具　廷鎬・村田右富実
堀河院中宮と堀河中宮　竹下　豊
化導する玄賓　―『発心集』巻第四第六話の再検討―　旅田　孟
保科孝一の「話方」教授観　永田　洋史

第二十五号　（二〇一四年三月）
万葉歌の「邊」の用法について　李　敬美
化導する増賀　―『今昔物語集』巻一九第一八話試論―　旅田　孟
『徒然草』第十段再考　池上　保之
『古今著聞集』「魚虫禽獣」篇の混沌をどう読むか　田中　宗博

第二十六号　（二〇一五年三月）
かたりし継げば　古へ思ほゆ　―土理宣令の歌―　阪上　望
定家本『伊勢集』の一性格　―詞書「あるところに」をめぐって―　加藤　雄一
橘成季と後鳥羽院近臣　―『古今著聞集』と『十訓抄』―　旅田　孟

第二十七号　（二〇一六年三月）
扇絵の中の『伊勢物語』　青木賜鶴子
かるたの中の伊勢物語　藤島　綾
中世散文に見る「嗄声」　旅田　孟

第二十八号　（二〇一七年三月）
色紙の中の伊勢物語　―《宗達伊勢物語図色紙》の表現―　泉　紀子
伊勢と貫之　―歌表現の共通性をめぐって―　加藤　雄一
浮舟の手習歌　―その異質性と機能について―　小西　美来
鼻のイメージについての考察　―笑いと畏れ―　旅田　孟
保科孝一の西洋国語教育論の摂取　―文法教育論の場合―　永田　洋史

第二十九号　（二〇一八年三月）
蔵書印でたどる大阪府立大学図書館小史　青田　寿美
『源氏物語』唱和歌考　―橘の小島における浮舟詠の解釈を中心に―　小西　美来
二十世紀後半における和歌の英訳　ジョシュア・モストウ

第三十号　（二〇二一年三月）
よくもここまで来たものだ　片桐　洋一
烏丸光廣『東行記』について　―架蔵本の紹介を兼ねて―　竹下　豊
境部老麻呂の三香原新都讃歌　村田右富実
天平感宝元年五月五日の大伴家持歌の性質　小田　芳寿
『万葉集』における月の擬人化表現　仲谷健太郎
是貞親王家歌合について　三木　麻子
兼輔集諸本の再検討　―西本願寺本の配列を起点として―　岸本　理恵
定家本『伊勢集』の書写態度　加藤　雄一
源　融　―『伊勢物語』に関連して―　内田美由紀
伊勢物語第五一段「人の前栽に菊」小考　―注釈と絵と―　泉　紀子
『伊勢物語』の解釈と挿絵　―住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として―　青木賜鶴子
〈唱和歌〉の契機　―『源氏物語』の連帯の場に関する考察―　小西　美来
〈研究覚書〉歌人鴨長明と説話　田中　宗博
『十訓抄』編者の公任への態度　―巻四第十七・十八話から考える後藤基綱編者説の妥当性―　旅田　孟
『続教訓鈔』における横笛伝承　―「大丸」「虎丸」「下腰丸」説話の背景―　妹尾　恵里
『徒然草』第一六二段考　―承仕法師の罪と兼好の視点―　池上　保之
「体・用」の別と修飾　山東　功
難後拾遺注釈（一）　鳥井千佳子
〈翻刻〉大阪府立大学図書館蔵『平家物語』（一）　奥村　和子
『百舌鳥国文』総目次（第一号～第三十号）